

# 研究ノート ロシア貨幣概史(1)

——最近の諸研究を土台とした15世紀初頭までの叙述<sup>(1)</sup>——

加藤 一郎

## Краткий очерк истории русских монет (1)

Ичиро Като

### 目 次 (оглавление)

- (1) アラブ銀貨とロシア古銭学の発達 (Арабские серебряные монеты и развитие русской нумизматики)
- (2) 古代ロシアにおける西欧貨幣 (Западноевропейские монеты в Древней Руси)
- (3) 古代ロシアにおける通貨重量・単位制度 (Денежно = весовая система в Древней Руси)
- (4) キーエフ諸公の貨幣 (Монеты киевских князей)
- (5) 無貨幣時代 (Безмонетский период)
- (6) キプチャク汗国の貨幣 (Монеты Золотой Орды)
- (7) モンゴルの支配時代のロシア諸公の貨幣 (Монеты русских князей в периоде монгольского господства)

### (1) アラブ銀貨とロシア古銭学の発達

ロシア各地では18世紀末以来、アラブ銀貨=ディルヘムの埋蔵地が多数発見されてきている。(埋蔵地の数は、時代が新しくなるほど多くなっていく。後述する19世紀前半のフレンの研究では40、19世紀後半のマールコフの研究では384、20世紀前半のファスマルの研究では750、今日では1000とも考えられている。)

図(1)は、9世紀のディルヘム銀貨である。このディルヘム銀貨は、ウマイヤ朝中期の7世紀末にイスラム帝国に導入され、クファ文字と呼ばれる特別な文字を使用していたために、「クファ貨幣」とも呼ばれるものであった。重さは約3gであり、その後6世紀間にわたって、中央アジアからイベリア半島にいたるイスラム国家で広範に使用され、商業貨幣として東ヨーロッパ、北ヨーロッパさらにはイギリスにまで浸透した。その結果、とりわけ当時イスラム地域との商業交易路となっていたバルト海を中心とするロシア、スカンディナビア、東ヨーロッパには大量のディルヘムが埋蔵貨幣として蓄積されたのである<sup>(2)</sup>。

このような埋蔵ディルヘムの分類に着手し、それを古代ロシア・東ヨーロッパ世界の歴史の解明に利用しようとしたのが、のちに「東方古銭学公」と自称したフレン(Христиан Данилович Френ, 1782~1851)であった。彼はすでに、講義に招請されていたカザーン大学でキプチャ

ク汗国の貨幣のコレクションに接して、これをキプチャク汗国の政治史の解明に利用して、たとえばロシア年代記などの文書資料だけでは判然としていなかったキプチャク汗の名称や在位年代などを明らかにしていたが（『ジュチ・ウルスあるいはキプチャク汗国の汗の貨幣』*Über die Münzen der Chane vom Ulus Dshutschis oder der Goldenen Horde*, St. Petersburg, 1832）、この方法をディルヘム銀貨にも適用したのである。彼は埋蔵銀貨の発掘地のリストを作成し、埋蔵銀貨を、それを発行したイスラム諸王朝に従って分類した。彼によると、ディルヘムはイスラム商人がカスピ海、ヴォールガ川、ヴォールガ・ブルガリア経由でバルト海およびスカンディナヴィア地方まで運んできたものであり、またノルマン人やのちにはルーシ人も遠征その他によってディルヘムを運んできたという（『ペテルブルク帝国科学アカデミーのイスラム貨幣の研究』*Recensio numorum muhammedanorum Academiae Imperialis Petropolitanae*, St. Petersburg, 1826）。フレンはロシアだけでなく、ヨーロッパ全体のディルヘム研究の先駆者であった<sup>(3)</sup>。

このフレンの弟子サヴェリエフ（Павел Степанович Савельев, 1841～1859）はフレンの研究を継承して、1847年に刊行された『ロシア史に関するイスラム古銭学』（*Мухаммеданская нумизматика в отношении к русской истории*, СПб, 1847）のなかで、やはりディルヘム銀貨の埋蔵地点を分類し、7世紀末から11世紀にかけて広範な商業交易関係がイスラム世界と東ヨーロッパ・ロシア世界との間に存在したことを指摘した。彼はまたキプチャク汗国の古銭学の研究に従事しており、1857～1858年に『トフタムイシ時代のキプチャク汗国で流通していたジュチ、チャガタイ、ジェラル朝の貨幣』（*Монеты Джучидов, Джагатаидов, Джелаиридов и другие обращавшиеся в Золотой Орде в эпоху Тохтамышя*, СПб, 1857～1858）を発表している<sup>(4)</sup>。

さらに、東洋学と考古学を専門とし、エルミタージュの東方貨幣コレクションの保管・整理を担当していたマールコフ（Алексей Константинович Марков, 1858～1920）は、ディルヘムが発行される前に、イスラムの征服以後もイスラム地域で使用されていたササン朝ペルシアのドラフマ貨幣もアラブ貨幣の中に入れて、分類目録を作成した（『帝室エルミタージュのイスラム貨幣目録』*Инвентарный каталог мусульманских монет Императорского Эрмитажа*, СПб, 1896、『東方貨幣（ササン朝貨幣とクファ貨幣）の埋蔵地の地理的分類』、*Топография кладов восточных монет (сасанидских и куфических)*, СПб, 1910）。<sup>(5)</sup>また、キプチャク汗国に関するアラブ語・ペルシア語史料の露訳資料集の刊行で有名なチゼンガウゼン（Владимир Густавович Тизенгаузен, 1825～1902）もやはり東方貨幣の分類を行っている（『東方カリフ国の貨幣』*Монеты Восточного Халифата*, СПб, 1874）。<sup>(6)</sup>

以上のように、ロシア古銭学は、国内で大量に発見されるアラブ貨幣およびキプチャク汗国の貨幣の収集と分類を通じて発展してきたが、歴史資料としての貨幣の重要性に注目し、古銭学の方法論的原則を確立したのは、オレシニコフ（Алексей Васильевич Орешников, 1855～1933）であった。彼は商人の家に生まれ、専門的な教育を受けることはなかったが、独学で研鑽を積み、1883年に創設された国立歴史博物館に勤務し、ここで古銭学の研究とコレクションの収集に従事した。

彼はその生涯で多方面にわたって130以上の論文・著作を発表したが、その中でも主な関心は古代の黒海沿岸の貨幣および古代ロシアの貨幣に注がれていた（『銘文と国王の貨幣によるスパルト朝時代のキムメリア・ボスポロス』*Боспор Киммерникий в эпоху Спартокидов по надписям и царским монетам*, М., 1884、『黒海沿岸の古銭に関する試論』*Этюды по нумизма-*

тике Черноморского побережья, П., 1921, 『1547年までのロシアの貨幣』 Русские монеты до 1547 г., М., 1896. 『モンゴル以前のルーシの貨幣記号』 Денежные знаки домонгольской Руси, М., 1936). (7)

注目すべきは、オレシニコフが古銭学に、伝統的な文書資料に基づく歴史研究を補足する学問の位置を与え、その方法を確立したことである。彼の後継者でもあるフォードロフ・ダヴィドフ (Г. А. Фёдоров=Давыдов) は、ロシア諸公国の貨幣に関してではあるが、この点についてこうまとめている。

ロシアの古銭学において「根本的な前進がなされたのは、1896年にオレシニコフの著作『1547年までのロシアの貨幣』が上梓されてからのことであった。この著作は、14～16世紀のロシアの古銭学の発展にとって基本的なものである。オレシニコフは通貨事業の発展が持っている歴史的な法則性を明らかにした。彼は貨幣の両面の模様が形成される原則を研究し、そのことによって、銘文が判読できないために確定できない貨幣を、一つの鑄造センターにまとめることができた。彼は貨幣の両面の模様の形成における詳しい類似点——彼はこれを貨幣の「スタイル」と呼んでいる——に基づいて貨幣を分類することができることを示した。彼は、多くの公国に共通する貨幣の模様のテーマ (ケンタウルス、刀を持った戦士、豹その他) に基づいて、鑄造地を確定するやり方をまったく否定した。しかし、貨幣刻印機の貨幣切断者の「一人の手」あるいは「一つの流儀」を表している類似点に基づいて、貨幣の生産地を一つのセンターにまとめることが可能であると考えた。さらに、彼は、あれこれの貨幣鑄造センターの職人の仕事の個人的な特徴、職人グループの流儀の特徴を表しているような、銘文のなかの言葉の配置といったことも研究した。」(8)

ソ連時代にはいると、エルミタージュの東方貨幣コレクションの管理をマールコフから受け継いだファスメル (Richard P. Fasmel) が、1920年代と1930年に発表された一連の研究 (『1920年にノーヴゴロトで発見されたクファ貨幣の埋蔵地』 Клад куфических монет, найденный в Новгороде в 1920 г., 1925, 『10世紀のヴォールガ・ブルガールの貨幣』 О монетах Волжских Волгар X века, 1926, 『白ロシアのスタールイ・ヂェヂェン村で発見されたクファ貨幣の埋蔵』 Ein in Dorfs Staryi Dedin in Weissrussland gemachter Fund kufischer Münzen, 1929, 『5～9世紀のクファ貨幣のザバリシンスクの埋蔵』 Завалищинский клад куфических монет V—IX в., 1931, 『東ヨーロッパのクファ貨幣の発見地に関する新しい地理学的分類の出版について』 Об издании новой типографии находок куфических монет в Восточной Европе, 1933) を通じて、ロシアに流入したアラブ貨幣の分類を進めた。

ファスメルによると、ディルヘルムがロシアに流入し始めたのは、9世紀初頭のことであり、この流入は1015年頃まで続いた。この2世紀の間に、流入した貨幣の構成は変化しており、年代的に以下の4つのグループに分類することができるという。

- ① 7世紀末～9世紀の第一四半期：埋蔵貨幣のほとんどは、アッバース朝のディルヘルムであり、大部分は北アフリカの鉱山で産出されたものを原料としている。
- ② 9世紀半ば～10世紀初頭：アッバース朝のディルヘルムが圧倒的であるが、バクダッド、クファ、バスラなど中東の主要都市で鑄造されたものが支配的となる。
- ③ 10世紀初頭～10世紀後半：アッバース朝のディルヘルムは衰退し、サマルカンドやブハラなどで鑄造された中央アジアのサマニード朝のディルヘルムが圧倒的となった。(サマニード朝は9世紀にトランスオクシアナ地方を根拠地として成立したイスラム王朝で、全盛期に

はイラン地方も領有し、中心都市のサマルカンドやブハラの経済的繁栄はめざましく、交易の中心地であった。このために、このサマニード朝が鑄造したディルヘムがロシアや北ヨーロッパでも大量に発見されているのである。)

- ④10世紀後半～11世紀前半：サマニード朝のディルヘムがまた優勢ではあるが、ジェラル朝やブワイフ朝のディルヘムを登場するようになる<sup>9)</sup>。

以上のように、ロシアの古銭学はロシア各地に散在するアラブ銀貨の分類、流入・流出経路の分析などを通じて発達してきたわけであるが、アラブ銀貨に関心を持つ研究者の問題意識の基本にあったのは、単に古代の珍しい遺物の収集・分類ということは別にして、このアラブ銀貨がロシア地域でいかなる役割を果たしたのかということであった。フォードロフ・ダヴィドフはこの問題を「ルーシはイスラムの東方と北のスキャンディナビア・バルト海沿岸地方との間の銀の送信機にすぎなかったのか、ロシアの中の埋蔵貨幣は、銀を運んできた商人達によって偶然に隠されたものなのか、それとも、ルーシには独自の商業、独自の通貨流通があり、埋蔵貨幣はこの証拠であるのか」<sup>10)</sup>とまとめているが、ここからもわかるように、この問題は、スキャンディナビア、ロシア、イスラムとの関連、もっと具体的にはスキャンディナビア・バルト海沿岸のノルマン人(ヴァリヤーク人)、ロシア地域の東スラヴ諸族、ビザンツ帝国も含めた東方諸国家の間の経済的関係、すなわち古代ロシア史上最大の論点の一つである古代ロシア国家の建国とその国家の性格という問題(ノルマニスト論争)と密接に関連していた。

この問題に関して、スウェーデンの古銭学者スチュール・ボーリン(Sture Bolin)は、イスラムの地中海支配と西ヨーロッパ世界との関連を提起したいわゆる「ピレンヌ・テーゼ」をめぐる論争の中で発表した「マホメット、シャルルマーニュ、およびリユリック」(Mohammad, Charlemagne and Ruric, 1939)のなかで、基本的にはアラブ銀貨はロシア地方を通過したのにすぎないと結論した。すなわち、イスラムの地中海支配によって、北ヨーロッパ、東ヨーロッパの毛皮・奴隷産地との間のフランスの通貨貿易が、やがて東方諸ルートによるノルマン・アラブの直接貿易にとって代われ、「ノルマン人の船は、遥に遠くの中央アジアのもっとも重要な銀産諸地域で産出する貴金属を、東ヨーロッパの諸河川を利用して、ハザール、ブルガールからバルト海、北海へと輸送したのであった」<sup>11)</sup>というのである。もちろん、こうしたボーリンの結論は、古代ロシア国家の形成におけるノルマン人=ヴァリヤーク人の果たした役割を強調する「ノルマニスト理論」と軌をいつにしていた。

こうした「ノルマニスト理論」を古銭学の立場から補強してしまうようなボーリンの結論は、当然のことながら、ソ連の研究者の反発を招いている。フォーミン(A. В. Фомин)は、各地の埋蔵貨幣がその構成要素によって分類できること自体が、独自の貨幣流通がルーシに存在していたことの証拠であると述べ、またフォードロフ・ダヴィドフも、埋蔵貨幣の構成を丹念に分析すれば、ボーリンの結論とは逆であって、「埋蔵貨幣の構成は、9-11世紀のルーシには通貨の流通が存在したことを物語っている」と主張している<sup>12)</sup>。もっとも、古代ロシア国家の創設期である9世紀頃に、独自の通貨流通を必要とするほど、ルーシの商業経済が発達していたとは言いがたいために、フォードロフ・ダヴィドフにしても、先の結論に続けて、通貨の流通があまり発展していなかったために、イスラム圏から「大量の貨幣が流入すると、それは市場に出るのではなく、すぐさま隠匿され、まったく特別な埋蔵貨幣グループを形成した」ことも認めざるをえなくなっている<sup>13)</sup>。

以上のように、アラブのディルヘム銀貨をめぐる問題は、今日でも考古学的な調査が進行中

であり、さらに古代ロシア史上の重要な論点と関連しているがゆえに、未解決の諸問題をかかえている。ここでは、「エストニアとラトヴィアの970年以前の埋蔵ディルヘルム」(Pre-970 Dirham Hoards from Estonia and Latvia)、「ハザール人は貨幣経済を持っていたのか。古銭学資料による分析」(Did the Khazars Possess a Monetary Economy? An Analysis of the Numismatic Evidence)、「ディルヘルムがウクライナに最初にやってきたのは、いつか」(When did Dirhams First Reach the Ukraine?)などの論稿を近年精力的に発表しているヌーナン(T. S. Noonan)のこの問題に関する整理を引用して、今後の研究の出発点としておこう。

「今日では、8世紀末と9世紀初頭にロシアにはじめて入ってきたディルヘルムは、ハザール汗国を經由して、カフカース山脈、カスピ海をとおってやってきた、とされている。ハザールとアラブの関係が8世紀末に変化して、ロシアとバルト海地方にディルヘルムの流入をもたらすようになった理由とプロセスはまだ明らかにされていない。研究者達は、まさにこの時期にディルヘルムが北方に輸出されることを促した特別な条件も明らかにしていない。さらに、ルーシとバルト海地方でディルヘルムの大量の流入に巻き込まれた住民の素性も明らかにしていない。ファスメル時代区分は、偉大な道標ではあったけれども、当該時代のロシアの埋蔵ディルヘルムの特徴が各地域の埋蔵貨幣に適用できるかどうかは確かではない。それゆえ、ロシア各地の埋蔵ディルヘルムについてもっと情報が必要である。さらに、王朝やディルヘルムの鑄造地、鑄造年代に基づく時代区分が、ヨーロッパ・ロシアとバルト海地方の歴史的経済的發展段階に対応しているか検討しなくてはならない。

10世紀の埋蔵物の中で、中央アジアの鉱山からのサマニード朝のディルヘルムが優勢であったことは、910年頃には、ディルヘルムが中世ロシアに流入するルートが中央アジアを出発点としていることを示している。しかし、この変化が起こる以前に、どのくらいの期間、ディルヘルムがカフカース・カスピ海ルートを移動したのかはわかっていない。さらに、ロシアとスカンディナヴィアへのディルヘルムの流入が960年代、970年代に急速に衰退し、1012年頃に突然中断してしまったのか、研究されなくてはならない。近年の研究によると、(965年頃のヴォールガ・ブルガリアとハザールへのスヴァトスラーフの遠征ではなく)、中央アジアで起こった『銀の危機』がこの状況の変化をもっとうまく説明している。しかし、『銀の危機』の原因については、もっと十分に探究されなくてはならない。最後に、ロシアとスカンディナヴィアへのディルヘルムの流入のなかで、金属としての銀の需要に応えるものとしての、交易が果たした重要性も検討しなくてはならない。こうした点が、ロシアへのディルヘルムの流入問題を解決するにあたっての、重要な歴史的問題の数例である。」<sup>14)</sup>

## (2) 古代ロシアにおける西欧貨幣

11-12世紀、イスラム帝国では、中央アジアの鉱山、鉱山の枯渇に起因するいわゆる「銀の危機」が起こり、ディルヘルム銀貨の鑄造は次々と中止された。今日でも、この「銀の危機」の原因は十分に解明されていないが、原因がなんであるにせよ、8世紀末、9世紀初頭から続いたロシア・ヨーロッパ世界へのアラブ銀貨の大量流入は中断されてしまった。そのかわりに、11世紀の後半から、ロシアには西ヨーロッパのディナリア銀貨の流入が始まり、アラブのディルヘルム銀貨と比較すれば少ないものの、ロシアの各地で埋蔵ディナリア銀貨が発見されている。

図(2)は、初代神聖ローマ皇帝オットー1世発行した10世紀のデナリア銀貨である。このディナリア銀貨は8世紀初期から13世紀末にかけてほぼヨーロッパ全域で使用された標準的な銀貨であり、中世の各国家の中で独自の名称を持っていた(イギリスでは「ペニー(penny)」、ド

イツでは「プフェニヒ (Pfennig)」, フランスでは「デニエ (denier)」. カール大帝の時代から, 1カロリング朝フント (約408g) の銀から240個のディナリアが鑄造され, 1つが約1.7gであった。

11世紀中頃までのものと推定されるロシアの埋蔵貨幣は, 圧倒的にアラブのディルヘム銀貨で構成されているが, これ以降の埋蔵貨幣では, 急速に西ヨーロッパからのディナリア銀貨の割合が高まっていった. 流入してきた西ヨーロッパのディナリアのなかでは, ドイツで鑄造されたものが一番多く, イギリスのものがそれに次ぎ, ハンガリーやデンマーク, スウェーデン, ノルウェーその他のものもあった<sup>95</sup>.

ロシアへの流入経路としては, まず第一に, スカンディナビア・ゴートランド島経由のルートがある. ゴートランド島は, アラブ銀貨と西ヨーロッパ銀貨の埋蔵貨幣が大量に発見される「宝島」であり, 8世紀から11世紀にかけてのノルマン武装商人団の広範な活動のおかげで, 東方地域とヨーロッパとの間の銀の流れの分岐点となっていた。

ノルマン人=ヴァリヤーク人がスカンディナビア・ゴートランド経由でロシアに西ヨーロッパの銀貨を大量に持ち込んだという主張は, 古代ロシア国家の成立に関する「ノルマン理論」を古銭学の立場から補強したものとなっている. それゆえ, アラブ銀貨をめぐる論争と同一のことが問題となり, フォードロフ・ダヴィドフなどのソ連の研究者は, 埋蔵貨幣の中でドイツで鑄造されたものの割合が高いことに注目し, バルト海南沿地方経由のルートの存在を強調している. 「ドイツからのルートは, スカンディナビアからのルートよりも多くの銀貨をもたらした. 11世紀の銀の取引には, ヴァイキングが役割を果たしたとはいっても, それはロマン主義的・民族主義的なものとはかなり違った小さなものであった」というのである<sup>96</sup>.

しかし, こうした西ヨーロッパの銀貨の流入も12世紀にはいと中断してしまう. 通説的には, 交易ルートの変化, 西ヨーロッパ諸国の経済が封建化したこと, 貨幣鑄造国の国内での貨幣の需要が増大し, 国外に流出しにくくなったことが原因とされている. だが, この問題を精力的に研究しているポーチン (В. М. Потин, 「10—11世紀の西ヨーロッパのディナリアの流入の特殊性と古代ルーシの領土へのその普及, Осовенности притока западноевропейских денариев X—XI вв. и их распространение на территории Древней Руси」, 「ルーシへの西ヨーロッパの貨幣の流入が12世紀に中断した理由 Причины прекращения притока западноевропейских монет на Русь в XII в.」, 「古銭学的資料による古代ルーシの商業に関する諸問題 Некоторые вопросы торговлей Древней Руси по нумизматическим данным」, 「西ヨーロッパの埋蔵貨幣資料による古代ルーシの経済的結び付き Экономические связи Древней Руси по материалам кладов западноевропейских монет」, 「古代ルーシの領土での10—13世紀の西ヨーロッパの貨幣の発見地の地理学的分類 Топография находок западноевропейских монет X—XIII вв. на территории Древней Руси」, 「10—13世紀の古代ルーシと西ヨーロッパ諸国. 歴史古銭学的研究, Древняя Русь и европейские государства в X—XIII вв. Историко-нумизматический очерк) によると, ドイツからの銀貨の形をとった銀の流出が中断されただけであって, 銀の鑄塊の形をとった流出は継続しており, 11世紀末からは, ロシア国内で大量の銀の鑄塊が流通していたという。

### (3) 古代ロシアの通貨重量・単位制度

古代ロシアの最古の成文法である『ルースカヤ・ブラウダ』では, ほとんどすべての犯罪行為に対して罰金が設定されていることはよく知られている. そのさい, 様々な通貨・貨幣の

重量・単位が登場している。たとえば、殺人や傷害行為に対する人命金あるいは補償金で頻繁に登場するのは、「グリーヴナ (гривна)」という単位である（「もしも、故意にオグシチャーニン（家職長）を殺したならば、その殺害者は80グリーヴナ支払わなくてはならない……」（簡素版19条）、「もしも、指を切り落としてしまったならば、3グリーヴナである」（簡素版7条）。また、馬や牛や羊の窃盗に対する罰金には、このグリーヴナとともに「ノガタ (ногата)」、「クナ (куна)」、「レザナ (резана)」、「ヴェヴェリシア (веверица)」などの単位も登場している<sup>(17)</sup>。

これらの単位の中で、「クナ」が古代ロシアの通貨重量・単位制度の基本的なものであり、それゆえ、古代ロシアの通貨制度は「クナ制度」とも呼ばれている。「クナ」という名称は、貨幣の流通が始まる以前に、イスラム圏との商業取引で貨幣の役割を果たしていた「テンの毛皮」(куний, куница) に由来している。キーエフ・ルーシでは、アラブのディルヘムも西ヨーロッパのディナリアも一般的には「クナ」と呼ばれ、「クナ」という単語はその後長い間（13世紀末まで）貨幣一般を意味しており、約2gの銀に対応していた<sup>(18)</sup>。

「グリーヴナ」という単位の名称の起源は、「首に（ナ・ザグリフケ, на загривке）」にかけられた金銀の装飾品に由来しており、のちに貴金属とくに銀の一定の重量に対応するようになった。重量の単位として「銀グリーヴナ」、計算の単位として「クナ・グリーヴナ」があり、「銀グリーヴナ」（204g）は、4「クナ・グリーヴナ」（51g）の価値を持っていた。『ルースカヤ・プラーヴダ』に登場している「グリーヴナ」は、「クナ・グリーヴナ」に対応している<sup>(19)</sup>。

「ノガタ」という名称は、「貨幣を選別する」「良質のものを選ぶ」という意味のアラブ語の「ナカダ」に由来する。約2.5gの銀に対応していた<sup>(20)</sup>。

「レザナ」は、その名称が「切断する」を意味する動詞「レザーチ (резать)」に由来していることから分かるように、小さな商業取引の便宜を図るための小額の通貨単位である。約1gの銀に対応している<sup>(21)</sup>。

「ヴェヴェリツァ」という名称は、「リス」を意味する「ベクシャ, векша」に由来しており、「クナ」と同様に、毛皮が商品通貨として流通していた時代の名残りを反映している。古代ロシアの最小の通貨単位であり、約0.3-0.5gの銀に対応していた<sup>(22)</sup>。

こうした単位の相互関係については、第一に、通貨の単位の相互関係を記述している文書資料を分析する方法（たとえば、『ルースカヤ・プラーヴダ』では、盗まれた家畜に対する補償金は、家畜の価額の高いものから低いものへというように記述されている）によって、第二に、埋蔵貨幣自体の重量を分析する方法によって、研究が進められてきた。それによると、11世紀のロシアでは、1グリーヴナ=20ノガタ=25クナ=50レザナという等式が成立していたとされている。もっと詳しい数値は以下のとおりである。

- 1グリーヴナ=約銀50g.
- 1ノガタ=約2.5g (1/20グリーヴナ) = 1と1/4クナ=2と1/2レザナ=5~7と1/2ヴェヴェリツァ.
- 1ノナ=約銀2g (1/25グリーヴナ) = 2レザナ=4~6ヴェヴェリツァ.
- 1レザナ=約銀1g (1/50グリーヴナ) = 2~3ヴェヴェリツァ.
- 1ヴェヴェリツァ=約銀0.5(0.3)g=1/100~1/150グリーヴナ.<sup>(23)</sup>



① ディルヘルム銀貨



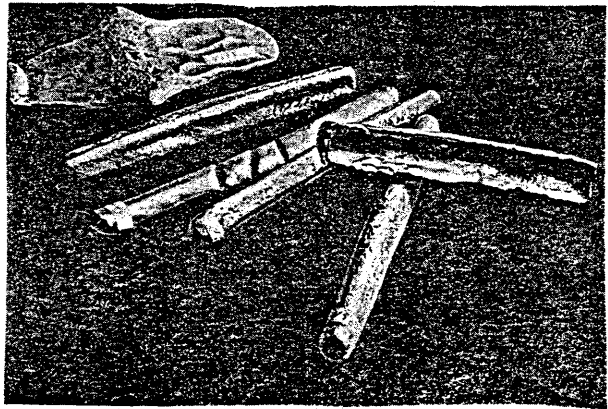
③ ウラヂーミル大公の銀貨



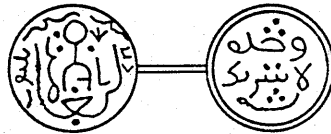
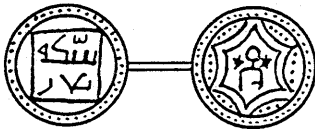
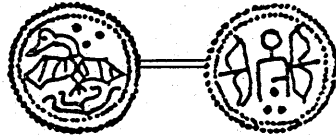
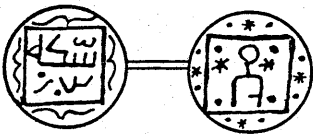
② ディナリア銀貨



④ ヤロスラーフ賢公の銀貨



⑤ 銀の鑄塊



⑥ キプチャク汗国の貨幣



このような古代ロシアの通貨重量・単位制度の起源についても、ディルヘルム銀貨やディナリア銀貨をめぐる論争と同様の論争が起っており、それを東方の制度の影響に求める説、西ヨーロッパの制度の影響を求める説（「ノルマン理論」）とが従来から対立してきた。この問題について、フォードロフ・ダヴィドフは「古代ルーシの通貨重量制度は、東方からあるいは西ヨーロッパからの借用ではなく、独立した現象であった。古代ルーシの制度には、他の地域の重量単位が含まれており、そこでは持ち込まれた通貨の重量の基準が考慮されていたけれども、この制度自体、ノガタ、クナ、レザナその他の単位計算は、固有の制度、古代ルーシ独自の制度であった」<sup>24</sup>と述べて、東方と西ヨーロッパの制度の影響は認めつつも、古代ロシア独自の制度が存在したと主張している。

#### (4) キーエフ諸公の貨幣

以上のようなアラブのディルヘルム銀貨や西ヨーロッパのディナリア銀貨のほかに、キーエフ・ルーシの諸公が発行した貨幣も存在する。しかし、それはディルヘルム銀貨やディナリア銀貨と比較すると、取るに足らないほど少数であり（全部で11の金貨と約330の銀貨）、古代ロシアの通貨流通では貨幣本来の経済的な役割を果たしてはいなかったと考えられる。10-11世紀のヨーロッパ諸国でも、成立したばかりの国家の国王たちは、経済流通の手段としてよりも、むしろ、自分たちの主権を内外に誇示するために、自分たちの名前などを刻印した貨幣を製造しているが、キーエフ諸公の貨幣もそれと同様に、諸公の主権宣言の政治的な宣伝手段であったのである（さらに、フォードロフ・ダヴィドフはアラビア文字やラテン語の文字が刻まれているディルヘルム銀貨やディナリア銀貨の中で、公の肖像を刻印したキーエフ諸公の貨幣は「小さなコインとして認識されていたのではないだろうか」と指摘している<sup>25</sup>）。

たとえば、ヴラヂーミル聖公の貨幣には、「王座のヴラヂーミル、これが彼の銀貨である」、「ヴラヂーミル、これが彼の銀貨（金貨）である」、「王座のヴラヂーミル」といった銘文が刻印されており（図(3)）、ヤロスラーフ賢公の貨幣には、まだ彼が公位に付いていない時期に製造されたために、たんに「ヤロスラーフの銀貨」という銘文が刻印されている（図(4)）。

#### (5) 無貨幣時代

先述したように、東方のディルヘルム銀貨は11世紀初頭に、西ヨーロッパのディナリア銀貨は12世紀にロシアに流入してこなくなった。この結果、12世紀には貨幣はロシアから消滅し、以後14世紀後半のドミートリイ・ドンスコイの時代まで、ロシアでは「無貨幣時代」が続いた。

「無貨幣時代」とはといっても、流通手段としての銀の役割が全く無くなってしまったのではない。銀は「貨幣」という形ではなく、一定の重量にまとめられた「铸塊」として流通の手段となっていた。元々、ロシアはディルヘルム銀貨とディナリア銀貨に対しても、それが大量に流入していた時代にも、特定の価値を持った貨幣としてではなく、一定の重量の貴金属を含んだ物質として対応していたといえるから、東方と西ヨーロッパからの「銀貨」の流入が中断したといつても、何か特別な事件がロシアの経済流通の中に起こったわけではないともいえる。さらに、主権宣言の政治的宣伝手段という貨幣の「政治的役割」という側面から見てみると、この時代はロシア史上の「分領時代」にあっており、かつてのキーエフ大公のような政治的中心となる諸公が存在しなかったことも、ロシア諸公が貨幣を製造しなくなった理由と考えられる。

国外から流入した銀製品、国内に蓄積されていた銀製品は、地域ごとに一定の重量と形を持った「铸塊」に姿を変えた（六角形の金属棒の形をした約160gのキーエフの铸塊、ハーモニカ

の形をした約196gの北部ロシアの鑄塊など)。図(5)はこの鑄塊の1例である。のちに、ノーヴゴロトの鑄塊(約200gの棒状の鑄塊で、ノーヴゴロト・グリーヴナとも呼ばれた)は、将来のロシアの基本的な通貨単位となる「ルーブリ」と呼ばれることになるが、この「ルーブリ」という名称が、「割る」を意味する動詞「ルビーチ(рубить)」、切斷するを意味する動詞「ラズルバーチ(разрубать)」に由来していることは、鑄塊の製造過程を象徴しているといえよう<sup>99</sup>。

この銀の鑄塊は、約銀200g前後と高価であるので、「無貨幣時代」の日常の小額の取引では、貨幣の代わりに様々な通貨商品が使用された。「プリアースリツァ」という粘土板で出来た糸車の錘、首飾り、貝殻などが通貨商品として使用されたが、おそらく、もっとも一般的に使用されたのは、古代スラヴ族以来からの伝統であるリスヤテンの毛皮であったろう。

#### (6) キプチャク汗国の貨幣

13世紀半ばに、ロシアと東ヨーロッパの一部を属領としたキプチャク汗国でも、貨幣は発行されていた。多くの国々と同様に、銀貨が基準貨幣であった(金貨は発行されていない)。1310/1311年に、トフタ汗が幣制改革を実行して、最初はサライで鑄造されたディルヘム銀貨を標準通貨として銀本位制が確立され、14世紀後半の汗国の全盛期であるウズベク汗の時代にはサライの銀貨だけが汗国で流通しており、この状態はトフタムシ汗の幣制改革まで続いた。ただし、「銀の危機」の影響を受けたためであろうか、銀貨の補助貨幣として、「ブル」と呼ばれる銅貨も大量に鑄造された。図(6)が、この「ブル」銅貨であるが、表側には、貨幣の発行年と発行地、裏側には、各種の生物、鳥、花、道具(水差し、斧)、幾何学的模様が刻印されており、約1-2gであった。

また、図(7)は、1961年にモルドヴァ共和国で発掘された、トフタムシ汗の銀貨であるが、多少の相違はあるにせよ基本的には、表側には、「トフタムシ、彼の王国が永遠であるように」といったトフタムシ汗を称える銘文、裏側には数個の円弧状の模様が刻印されている。

2世紀半にわたるモンゴル人の支配が、ロシアの財政=徴税制度に大きな影響を与えたことはよく知られた事実であるが、当然のことながら、キプチャク汗国の通貨制度もモンゴル支配時代のロシアに大きな痕跡を残している。このことが典型的に現われているのは、通貨の単位の名称である。今日では「金銭」一般を意味する「デーニギ(деньги)」は14世紀末からモスクワで鑄造され始めた銀貨「デンガ(денга)」に由来しているが(18世紀末から「デーニガ(деньга)」と書かれるようになった)、その起源はモンゴル語の「テンガ(тенга)」にある。17世紀後半から18世紀初頭にかけて、今日の「デーニギ」と同様に、やはり貨幣一般を意味していた「アルトゥイン(алтын)」も、6を意味するモンゴル語「アルトゥイ」に由来しており、ロシア側がキプチャク汗国に貢税を納入するさいに、「10進法への萌芽を見せていたロシアの通貨制度から、12進法であったモンゴル・タタールの通貨制度に移るにあたって、媒介的な役割を果たした」(14-15世紀のモスクワでは、1ルーブリが200デンガで、6デンガが1アルトゥインであった)。また、15-16世紀初頭に鑄造されたロシアの銅貨は「プロ」と呼ばれているが、これはもちろん、前述したキプチャク汗国の「ブル」銅貨に由来している<sup>100</sup>。

このように、モンゴル支配時代のロシアの貨幣流通では、通貨単位の借用に現れているように、モンゴル人の通貨制度が大きな役割を果たした。もっと具体的には14世紀後半から再開されるロシア固有の貨幣の発行に多大な貢献をしたと思われるが、これに対する反論もある。たとえば、フョードロフ・ダヴィドフは、ロシアの貨幣がキプチャク汗国の領内では発見されておらず、一方キプチャク汗国の貨幣もロシア経済のセンターでは発見されていないことから、

通貨の流通の面ではロシアとキプチャク汗国の結びつきは弱いものであった（「貢税」の納入は貨幣ではなく、「鑄塊」で行われた）と推定し、後述するように、ロシア諸公の発行した貨幣にキプチャク汗国の貨幣を模倣した点があるとすれば、それはキプチャク汗国への経済的従属のためではなく、政治的従属のためであったと考えている<sup>88</sup>。

#### (7) モンゴルの支配時代のロシア諸公の貨幣

「無貨幣時代」を経て、貨幣の鑄造がロシアで再開されたのは、1380年代、モスクワ公ドミートリイ・ドンスコイの時代であった。当時、キプチャク汗国のロシア支配の動揺・弱体化およびモスクワを中心とするロシアの再統一という二つの政治過程が同時進行しており、ロシア諸公の貨幣の様式にも、この二つの政治過程の具体的表現、すなわち貨幣の発行者とキプチャク汗国との従属関係の程度、および発行者のロシア諸公の中での地位が的確に反映されていた。逆にいえば、諸公たちの発行した貨幣の様式を分析することで、対外的にはモスクワ大公およびその他のロシア諸公とキプチャク汗国との政治的従属関係（ロシアとキプチャク汗国との関係）、国内的にはロシア諸公の政治的力関係（諸公間の主君・家臣関係）が明らかになるわけである。

図(8)は、モスクワ大公ドミートリイ・ドンスコイ（1362-89）の貨幣である。表側には、斧と剣を持った戦士の像の周囲にロシア語で「大公ドミートリイ鑄造」との円形の銘文、裏側には、アラビア語で「スルタン・トフタムイシ、長命であらんことを」との3行の銘文が刻印されている（銘文の文字が欠けている場合が多いが、その他のドミートリイの貨幣からの断片を総合して再現した。以下の貨幣も同様である）。

表側にロシア語で「大公ドミートリイ」という銘文が刻印してあることは、キプチャク汗国の支配下にある地域の貨幣がすべてキプチャク汗の名前で発行されていることを考慮すると、ロシアがキプチャク汗国の完全な属領ではなく、汗国の中でかなりの自立性・独立性を認められた地域であったことを示している。同時に、裏側のトフタムイシ汗を称えるアラビア語の銘文は、もちろんキプチャク汗国への政治的な従属を表現していた。もっとも、トフタムイシ汗への言及は、ロシア諸公の中で汗国の「第一の家臣」したがってロシア諸公の筆頭の地位を現すという、ロシア国内向けの意味も持っていた（したがって、モスクワ大公ドミートリイより「格下」のニジェゴロト公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチの貨幣の裏側には、トフタムイシ汗への言及はなく、汗国貨幣を粗雑に模倣した模様が刻印されている）。クリコーヴォの戦いで勝利を収めたものの、トフタムイシ汗の遠征に膝を屈しなればならなかったドミートリイ・ドンスコイの貨幣は、モスクワ大公がキプチャク汗国の属領の中では特別な地位を持っている「ロシア・ウルス」の長であること、と同時に以前としてキプチャク汗の家臣であることを示しているのである。

次のモスクワ大公ヴァシーリイ・ドミトリエヴィチ（1389-1425）の貨幣は、汗国との力関係の変化を反映して、発行年代にしたがって貨幣様式が変化している。図(9)は彼の貨幣のうちで初期のものであるが、表側には、手に鷹を持った騎士の周囲にロシア語で「大公ヴァシーリイ」との銘文、裏側には、アラビア語で「スルタン・トフタムイシ、長命であらんことを」との3行の銘文が刻印されており、ドミートリイ・ドンスコイの貨幣様式と同一である。したがって、ヴァシーリイ1世はその治世の当初にはキプチャク汗国の宗主権を完全に認めていたことになる。

しかし、1399年のフォルクスラ河畔の戦いで、トフタムイシ汗の汗国軍とリトアニア大公国



1



2



3



4



5



6

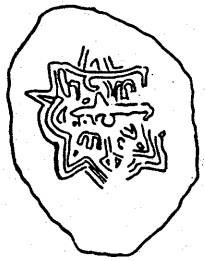
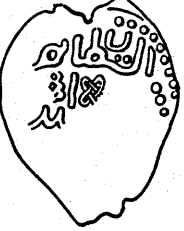
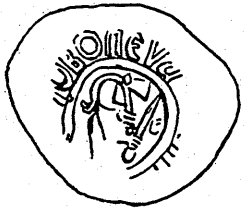
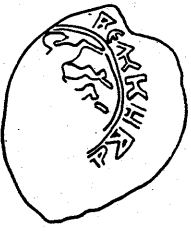


7



⑧ ドミートリイ・ドンスコイの貨幣

⑦ トフタムイシ汗の貨幣



⑨ ヴァシーリーイ世の貨幣

⑩ ヴァシーリーイ世の貨幣

⑪ ピョートル・ドミトリエヴィチの貨幣

軍の連合軍がエディゲイの軍に敗れ、ヴァシーリイ1世にとっては宗主国である汗国と、ロシアの統一をめぐるライバルであるリトアニアが一時的にはあるにせよ衰退すると、ヴァシーリイの貨幣様式は大きく変化する(図10)。表側には、頭をもたげ、尾を背の上に折曲げ左方に飛んでいく姿勢をした豹の像の周囲に、「ヴァシーリイ・ドミトリエヴィチ」という円形の銘文が、裏側には「全ルーシの大公ヴァシーリイ」という5行の銘文が刻印されている。

トフタムイシ汗の名前とアラビア文字が消滅したことは、ヴァシーリイ1世がキプチャク汗国への政治的従属を拒否していることを、単なる「大公」という称号ではなく「全ルーシの大公」という称号が登場してきており、しかもウラヂーミル大公国の紋章である豹が使用されていることは、ウラヂーミル大公であるモスクワ大公がかつてのキーエフ・ルーシの全領土に対して権利を持っていることを示すものであった。

このようにヴァシーリイ1世はロシアの主権を回復したようにみえたが、それも一時のことであった。彼の治世の後半には(1414年以降)、「全ルーシの」という単語と豹の紋章は消滅し、汗国への政治的従属を現す模様や銘文が再度登場するのである。これはトフタムイシ汗に代わって、エディゲイが短期間ではあるが汗国のロシア支配を再建したためであった。ただし、このことは汗国への完全な従属を表現したヴァシーリイ1世の貨幣の初期の段階に復帰したことを意味しているわけではなかった。フォードロフ・ダヴィドフによれば、汗国への従属を表現する要素は、初期の要素とは異なって、①一時的な汗国の支配者エディゲイを、やはり一時的な汗国の支配者であり、しかも滅び去ったママイを意味するロシア語の暗号「ライ」で言及すること、②現存しない汗であるトフタムイシ汗の名前に粗雑なアラビア文字で言及すること、③イスラム教のシンボルを模倣すること、④チムールに包囲されていたホレズムのディルヘム銀貨を模倣すること、といった曖昧な形で現れている。したがって、「1410-1411年以後のモスクワの貨幣の『汗国的な要素をもつ表側』は特定のキプチャク汗への家臣関係ではなく、汗国一般への家臣関係を表現している。すなわち、汗国への家臣関係に関する一般的な表現は、人格化された、今では古臭くなってしまったトフタムイシの名前を言及することで伝えられている。これらの『汗国的な要素』のなかでは、エディゲイという人格はカモフラージュされている」というのである<sup>29</sup>。

14-15世紀のロシアで貨幣が鑄造されていたのは、主として、モスクワ、トヴェーリ、ニジニノヴゴロト、リャザンといった大公国およびノーヴゴロト・プスコフの都市共和国であったが、これらの大公国のなかの分領でも、分領公(年少公)たちが、自分たちの貨幣を発行していた。彼らの発行した貨幣も、彼らがおかれていた政治的地位を正確に反映していた。図(11)は、モスクワ大公国の分領であるドミトロフ公国の公ピョートル・ドミトリエヴィチの貨幣であるが、表側には、斧と剣を持った人物の像の周囲に「公ピョートル鑄造」との円形の銘文が、裏側にはウズベク汗の銀貨の模様の模倣が刻印されている。ピョートル・ドミトリエヴィチのような分領公には、あくまでも「公」という称号を刻印することしか認められていなかったのであり、また、トフタムイシ汗の名前を刻印することはロシアの諸公の長にのみ許されていたので、トフタムイシ汗の名前は登場してこない。

以上のように、モンゴルの支配時代のロシア諸公の貨幣は、クリコーヴォの戦い、トフタムイシ汗によるロシア支配の再建、その動揺、エディゲイのロシア遠征、チムールのキプチャク汗国への侵攻といったわずか半世紀の歴史的諸事件を的確に反映していた。この意味で、これらの貨幣は経済的な役割ではなく、権力の力関係を表現するという政治的な機能を果たしてい

たというべきであろう。(続く)

## 注

- (1) 本小論は、近年ソ連で刊行されたロシア貨幣史に関するフョードロフ・ダヴィドフの研究(Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, М., 1985, Монеты Московской Руси, М., 1981), ヴヂェニコフの研究(В. В. Уздеников, Монеты России 1700—1917, М., 1985), メリニコヴァの研究(А. С. Мельникова, Русские монеты от Ивана Грозного до Петра Первого, М., 1989) その他に依拠して叙述されており、筆者自身が考古学資料その他を直接研究したわけではない。この意味で、本小論文はあくまでも、従来の研究を要約・整理し、筆者個人の今後の研究の出発点としたものにすぎない。
- (2) В. В. Зварич, Нумизматический словарь, Львов, 1978, стр. 63—64, The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History (以下 MERSH と略), vol. 9, pp. 142—144.
- (3) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 105, MERSH, vol. 12, p. 24.
- (4) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 105, MERSH, vol. 33, p. 110., СИЭ, т. 12, стр. 446—447
- (5) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 105, MERSH, vol. 21, p. 106.
- (6) MERSH, vol. 9, p. 144.
- (7) MERSH, vol. 26, p. 91.
- (8) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты Московской Руси, стр. 9.
- (9) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 105, MERSH, vol. 9, p. 143.
- (10) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 105
- (11) スチュール・ポーリン, 「マホメット, シャルルマーニュ, 及びリユールック」, Н. ピレンヌ他, 佐々木克巳編訳『古代から中世へ』, 創文者, 1975年, 167—168, 176頁.
- (12) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 108.
- (13) там же
- (14) MERSH, vol. 9, p. 143.
- (15) Нумизматический словарь, стр. 52, MERSH, vol. 9, pp. 62—64.
- (16) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 113.
- (17) Русская Правда, Краткая редакция, Российское законодательство X—XX веков, М., 1984, том I, стр. 47—49.
- (18) Нумизматический словарь, стр. 96.
- (19) там же, стр. 40.
- (20) там же, стр. 121.
- (21) там же, стр. 143.
- (22) там же, стр. 32.
- (23) там же, стр. 96.
- (24) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 118.
- (25) там же, стр. 121.
- (26) Нумизматический словарь, стр. 146.
- (27) там же, стр. 9—10.
- (28) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты-свидетели прошлого, стр. 137—138.
- (29) Г. А. Федоров=Давыдов, Монеты Московской Руси, стр. 48—68.